

# 「真理の僕」ルネ・ゲノン

エゾテリスムと著作の公刊について

岡本倫典

「純粹数学の埒外にあって不可能という言葉を口にする者は、慎重さに欠けている。<sup>1</sup>」アラゴのこの言葉を、ナポレオンの余りにも有名な「不可能という言葉はフランス語ではない」と取り違えているフルカネリは<sup>2</sup>、いかにも、慎重さには欠けているのではあるが、ブルーデンティア、明知をも欠いていたとは言えないのかもしれない。実に、ある命題が不可能であることの、すなわち矛盾を内包していることの証明が数学において可能であるのは、それが数によって表現された量の考察に特化しているからである<sup>3</sup>。量の支配を離れて、論理学とともに質の領域へと一步進んだときから、もはやこうはいかない。人間の悟性の条件に関わり、それによって制約されている論理学は、証明の主体としての理性とその客体としての知識との二元性を前提としている。主体と客体とが一体ではない限りにおいて、理性による知識が直接的ではない限りにおいて、その間には常に誤謬の可能性がある<sup>4</sup>。理性によって推論するが故に、言い換えれば、理性を固有の認識機能として有する存在、人間であるが故に、人間は誤謬を免れないである。であってみれば、「不可能という言葉はフランス語ではない」どころか、そもそも不可能という言葉は、少なくとも純粹数学の分野を除くならば、人語でさえないわけである。

では、数量へと還元することのできない何らかの観念が可能であると、矛盾を内包していないと証明するにはどうすればよいのだろうか。既に述べたように、いかに緻密なものではあれ、論理に則ったのでは、無謬の説得には

<sup>1</sup> François Arago, *Oeuvres complètes*, t. 2, Gide et J. Baudry, 1854, p. 313.

<sup>2</sup> Fulcanelli, *Les Demeures philosophales*, t. 1, Société Nouvelles des Editions Pauvert, 1979, p. 130.

<sup>3</sup> より正確に言えば、ここで問題となっているのは、純粹数学の中でも特に代数学に限られている。幾何学にして既に、連続量である空間の分離量である数による表現が精密なものではあり得ないということに加えて、その対象とする図形にしてからが、完全に量へは還元されない要素を含んでいるのだから。

<sup>4</sup> 例えば、我思う故に我在り、と言うとき、思考する私は果たして存在する私であろうか。明らかにそうではない。存在する私は、思考する私ではなく、私は思考する思考する私でもなく、私は思考すると思考すると思考する私でもない。無限に遡って行ったとしても、思考する私の存在に思考によって辿り着くことは、敢えて言えば、不可能である。

なっても証明にはならない<sup>5</sup>。そこでエゾテリストたちは考えた、Errare humanum est であるとするならば、誤謬を超越してあることは人間とその条件を超越してあることである。理性による知識が誤謬に陥るのを避けられないのならば、理性以上の認識機能による知識を俟つて初めて誤謬を免れることが出来る。無謬の教義へと至るためにには、超人間的起源を持つ啓示と、超理性的機能、例えばルネ・ゲノンの術語によるならば知的直観によるその知識をこそ持まなければならない。「彼らは言葉において彼（アッラー）に先行することはなく、彼らは彼の御命令によって行動するのである。<sup>6</sup>」

ここに無謬を主張する教義の唱道者には二通りがある。方や、必ずしも神に限らない超人間的存在から直接靈感によって恵まれた、あるいはそうした存在について超理性的認識機能を通じて得られた知識を説く預言者がある。方や、自分自身が直接そうした知識に預かったのではなく、上の預言者より連綿と受け継がれた啓示の師資相承の教統に連なって、その伝統の名において語ろうとする人たちがある。私たちが主として取り上げてみたいのはこちらの人たちのことである。

そもそも伝統 tradition とは、語源に徴するに、伝える tradere ことであり、そこから敷衍して、伝えられるものを意味する。したがって、一定の連續性を保つつづ脈々と受け継がれたものがあれば、その内容の如何に問わらず、たとえそれが因習だとか迷信だとか称されるべきものであっても<sup>7</sup>、立派に伝統に相当するわけである。しかし、さしあたり問題となる伝統はそうした類ではない。超人間的な起源を有する、理性によっては到達し得ない知識、そしてそのこと自体によって誤謬を免れた真理であり、誤謬との相関によってのみ意味を持つような相対的な真理ではなく、個々の真理を真理たらしめるような真であることそのものの、こうした真理の真理の知識を受け継ぐ伝統である<sup>8</sup>。当然、この知識は理性を超越しているのであるから誰もが知り得るよ

<sup>5</sup> もちろん、論理はある命題の無謬性を証明することはできないが、有謬性を証明することは可能である。論理的に言って不条理なもの、矛盾を内包したもの、つまりは因果律に悖るものは誤謬であり、否定的な存在をしか持たない。

<sup>6</sup> クルアーン、XXI, 27.本論を通じてクルアーンの引用は『日亜対訳クルアーン』、作品社、2014、(中田考監修、中田香織・下村佳州訳)による。

<sup>7</sup> 因習や迷信の全てが直ちに謬説であるというわけではない。迷信を意味するドイツ語の単語の一つに Überglaube があるが、正しく、信仰 Glaube の彼方 über にあるような、つまりは万人向けの信仰としてのエゾテリズムの彼方にあるエゾテリズムの領分に属するような迷信もまた存在する。

<sup>8</sup> 間が光の欠如であるというような意味において、誤謬とは真理の欠如であるとは言えない。何となれば、全く真でないようなものなど存在するべくもないからである。むしろ誤謬とは断片化された真理であり、何らかの真理から切り離された部分と理

うな知識ではないし<sup>9</sup>、この真理は万人によって知られることを欲するような真理ではない。何故ならば、もし人間が人間である限りにおいてこの真理の知識に到達可能であるとするならば、そのこと自体によって人間は人間としての条件を超えてしているのでなければならないからである。かくしてここに私たちはエゾテリスムの羨道へと足を踏み入れる。

「君、わたしの手をとられよ。アールタバーガよ。われわれ兩人だけで、その問題を論じよう。われわれはそのことを人々のいる席で論議すべきではない<sup>10</sup>」、「無智の人の中にてこの経を説くこと莫かれ<sup>11</sup>」、あるいは、「聖なるものを犬に与えてはならない。また、あなた方の真珠を豚に投げ与えてはならない。犬や豚はそれらを足で踏みつけ、向き直って、あなた方を咬み裂くであろう<sup>12</sup>」。残念ながら、神殿の前（pro fanum）にたむろする「犬や豚」たる俗人（profanes）から、こうした勧めが必ずしもエゾテリストの身上を守ってくれるとは限らないのは、ピタゴラスやソクラテスの末期を見ての通りである。しかし、何より肝心なのは、「無智の人」の無理解によって真理の教えを捻じ曲げ貶め（profaner）させないことであった。実際、他の事柄に関しては、重箱の隅をつつくような、時として議論のための議論と言って差し支えないような長広舌を恣にしているソクラテスが、例えば『パideon』にあって、死後の魂の運命に関して哲学的に踏み込むところがほとんどないのは何故であろうか。「その理由はかくのごとくである。すなわち、肉体から解き放たれた魂の不滅の絶対的証明、並びに死という経験それ自体にしてからが、哲学的宗教的思惟の対象ではなく、人間が、あるいはより正確には

---

解するべきであろう。それに対して、真理の真理とは、個別の真理を部分として内包する全体であるが、全体は部分の総和ではないのだから、個別の真理の集合ではない。

<sup>9</sup> 理性は種としての人間に特有の認識機能であるから、全ての人間は理性を具備している。もとより、誰もが理性を備えていると言っても、皆が皆同じ程度に備えているのではない。ある人にとっては知り得ることでも、別の人にとっては、理性の不足の故に知り得ないということは当然ある。しかしながら、超理性的な知識を誰もが知り得るわけではないと言うとき、その知り得ない所以は、認識機能の程度の差ではなく、その性質の相違なのである。

<sup>10</sup> 『ウバニシャッド』、筑摩書房、2013、p. 214、(岩本裕編訳)

<sup>11</sup> 『法華經（上）』、岩波書店、1976、p. 216、(坂本幸男・岩本裕訳注)。

<sup>12</sup> 「マタイによる福音書」、VII, 6. 聖書の引用は『聖書』、サンパウロ、2013、(フランス語会聖書研究所訳注) による。

イニシエが秘儀において前にする証明であり、誰もが知ることを認められているわけではない証明であったのである<sup>13</sup>。」

ここで正しく魂の死後の命運を巡るエゾテリスムについて、フィチーノが挙げている道統を見てみることにしよう。「神学の範疇に属するこうした事柄に関して、往古、最高位にあった神学者六人は見解を同じうしていた。一人目は、マゴスの長ゾロアスター、二人目はエジプト祭司の王メルクリウス・トリスマギストゥスであったと言う。その後を襲ったのがオルフェウスで、オルフェウスの聖なる秘儀の伝授を受けたのがアグラオフェムスであった。神学において、アグラオフェムスに続いて出たのがピタゴラス、ピタゴラスに続いて出たのがプラトンで、これらの人皆の智慧を悉く究めて、それを著作中に昇華闡明した<sup>14</sup>。」しかしながら、この「智慧のエゾテリックな伝承」を評して、「語彙の選択と、遠い（そしてそれ故に権威と威信を備えた）源

<sup>13</sup> Roberto Sestito, *Il Figlio del sole*, Ancona, Associazione Culturale IGNIS, 2003, p. 34.

<sup>14</sup> Marsilio Ficino, *Platonic theology*, vol. VI, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 2006, p. 7. 最近、マルセイユ版として今に伝わるタロットの図柄、つまりはいわゆるウェイト版、アーサー・エドワード・ウェイトの構想、パメラ・コールマン・スミスの製作になるそれを始めとした近代の創案になるものではない、伝統的な図柄の起源をフィチーノに求める向きがあることは特筆に値する。すなわち、「遊びながら彼の友人や弟子たちにプラトン主義神学の深奥を伝授するための教育的なツールであった」（クリストフ・ポンセ, 『ボッティチエリ『プリマヴェラ』の謎』, 勁草書房, 2016, p. 122, (富岡愛美訳)）というのである。さて、正しくタロットとは「ヘルメスの書」であり、「魔術の万能の鍵であるそれはおよそ古代宗教の教義の鍵であり、カバラと聖書の鍵、ソロモンの小鍵である」(Eliphas Lévi, *Secrets de la magie*, Robert Laffont, 2000, p. 296) というエリファス・レヴィは、それから想を受けて、それぞれ大アルカナにちなんだ二十二章から成る『高等魔術の教理と祭儀』二巻をものして、近代オキュルティスムの鼻祖となつたのであった。この鍵は、より形而上学的な文脈の中でフリチョフ・シュオンの言う「知性の鍵」でもある。「真なる観念、つまりは全体としての真理の種々相を、結果として当の真理そのものを、多かれ少なかれ暗示するような観念に関しては、その故をもって、知性の鍵であり、それより他のいかなる存在理由も持たない。」(Frithjof Schuon, *De l'unité transcendante des religions*, L'Harmattan, 2014, p. 18.) 逆説的なことに、「カバラと聖書の鍵」「知性の鍵」を俗人に秘しながら、少数者には授けるのがエゾテリストであるのに対して、エグゾテリストはこの鍵の存在そのものを隠し、扉の向こうには何もないのだと言い張るのである。「律法の専門家たち、あなた方は不幸だ。あなた方は智識の鍵を取り上げ、あなた方自身が入らないばかりか、入ろうとする人々をも妨げてきた。」（「ルカによる福音書」, XI, 52.）「全体としての真理の種々相」を総合的に把握しようとするのがエゾテリストであり、この真理のある特定の様相を真理そのものであると考え、それ以外の様相を否定するのがエグゾテリストである。だが、長く使われない鍵が錆び付き、錠前を壊してしまうことがあるように、往々知識も堕落する。ソロモンの小鍵が妖書の代名詞となったように、タロットには不祥な力が纏わり付いているのである (Cfr. Arthur Edward Waite, *Shadows of life and thought*, London, Selwyn and Blount, 1938, p. 185.) 。Corruptio optimi pessimam...

泉への依拠は、文学的誇張以上のものではなくて、その目的はこれから説こうとしている教義に箔を付けることにある——それも、まるでイニシエーションにはふさわしからぬ、印刷物に書き付けるのであるからにはいきおい公共的でさえある仕方である<sup>15</sup>」と断じることは果たして妥当であろうか。上の例で言えばプラトンであるが、エゾテリスムを奉じるエゾテリストたる者が、秘密裏に伝承されるべき教えを、どうして著作にして公にするのか。それはエゾテリスムを裏切ることになるのではないのか。「入信していない者たちに秘儀を洩らす者は、不敬の罪を犯しているのだ。しかしに、秘儀の解説者は、入信していない者たちに秘儀を洩らしている。それゆえ、秘儀の解説者は不敬の罪を犯しているのだ<sup>16</sup>。」

遍く衆生の済度を存在理由とする宗教的エグゾテリスムの聖典が印刷され、広く頒布されるのは道理である。しかしに、秘密教であるべきエゾテリスム書に関しては、本来から言うと、「しかし、天にも地にも地の下にも、その巻物を開き、それを見ることのできる者は、一人もいなかった<sup>17</sup>」とまではいかないにしても、預言者の弟子の法統に連なる者のみが手に取ることのできるものであるはずである。それを出版して、書店の店頭に並べ、俗衆の目に曝すのは文字通り冒瀆に当たるはずである。以下では、この疑問に対する回答を、西洋史を通じて最も重要なエゾテリストであり、しかも半世紀以上に渡ってガリマールに自身の著作を主として収めた「伝統」叢書を擁する思想家ルネ・ゲノンの作品に依りつつ考えてみたい。

印刷物として公にされたエゾテリスム書との関連で、ゲノンは述べている、「鍊金術書に収められた象徴はここにあってエグゾテリスムを成しているの

<sup>15</sup> Vittoria Perrone Compagni, « Abracadabra : Le parole nella magia (Dicino, Pico, Agrippa) », *Rivista di Estetica*, vol. 42, n° 19, 2002, p. 112.

<sup>16</sup> ディオガネス・ラエルティオス、『ギリシア哲学者列伝』、中巻、岩波書店、1989、p. 361、(加来彰俊訳)。ベル・エポック最大のオキュルティスト、パピュス(ジエラール・アンコース)はやはり千古の教統を持んで言う、「古代人の科学とは、隠されたもの、エゾテリックなものの科学である。[...] 私たちは古代科学の穏当な定義を明らめることができよう、それはすなわち、隠された科学——*Scientia occulta*であり、隠されたものの科学——*Scientia occultati*であり、発見したところのものを隠す科学——*Scientia occultans*である。これこそが、*Science Occulte*の三重の定義である。」(Papus, *Traité méthodique de science occulte*, Georges Carré, 1891, pp. 67-68.) ところで、「発見したところのものを隠す科学」が「古代人の科学」であるとすれば、その発見されたものは当然「隠されたもの」であったはずであるが、発見されたものである以上はそれは「隠されたもの」の名には値しなくなる。であつてみれば、古代人の科学は「隠されたものの科学」とは言えなくなってしまう。

<sup>17</sup> 「ヨハネの黙示録」、V, 3.

に対して、秘されていたその解釈はエゾテリスムを成していた<sup>18</sup>。」この文章を正しく理解するためには、ゲノンの伝記作者によるならば夙に「エグゾテリスムの彼方の予感<sup>19</sup>」を有していたというエリファス・レヴィの記述と照らし合わせる必要がある。「おのがため総合の秘密を、魔術の禁域のかの宝物を秘藏しながら、アデプトは分析の方法のいくばくかを同時代人に教えた<sup>20</sup>。」こと鍊金術という伝統科学にあっては、と留保を付ける必要はあるものの、エゾテリスムとエグゾテリスムの差異は、より一般的な総合と分析とのそれへと還元されるのである。だが、そもそも総合と分析とはいがなる営為を指すのだろうか。

ゲノンによれば、分析とは「ある全体を再構築するのに、その構成要素を特異的かつ継時に捉える方法<sup>21</sup>」であるという。つまり、分析的な方法にとって、全体とはその部分の総和より以上でも以下でもない。しかし、全体は部分より以上のものである。何故ならば、全体が全体の部分に先在し、全体の中に全体の部分があるのであり、全体の部分の中に全体があるべくもないのは自明だからである。かくして、一二三と数えていったところで全ての数を数え尽くすことはできないように、分析はどこまでいっても全体の部分

<sup>18</sup> René Guénon, *Introduction générale à l'étude des doctrines hindoues*, Véga, 1952, p. 135.

<sup>19</sup> Paul Chacornac, *La Vie simple de René Guénon*, Editions Traditionnelles, 1958, p. 12.

<sup>20</sup> Eliphas Lévi, *Secrets de la magie*, op. cit., p. 551.ここで言う「アデプト」とは狭い意味でのそれ、「哲学者の石を発見した鍊金術師で、大業を成就した者」(Pierre Riffard, *Dictionnaire de l'ésotérisme*, Editions Payot et Rivages, 1983, p. 23.)を言う。このついでに、エゾテリスムにおける辞書の問題に触れておかないわけにはいかないだろう。実に、この手の辞書の古典である『神話・ヘルメス主義辞典』に言うように、「いかなる科学にあれ、ヘルメス哲学ほどに辞書を必要としたものはない」(Antoine-Joseph Pernety, *Dictionnaire mytho-hermétique*, Bauche, 1758, p. i.)にせよ、例えば、神智学系の出版社から出された『オカルティズム字彙』の序言に同書の企図として、「およそ隠秘学に関する概念、人名、年代について、俗人とイニシエとが簡便にして確実な解説を得られる」(Robert Nagel, *Okkultistisches Lexikon*, Leipzig, Theosophisches Verlagshaus, 1920, p. 3.)などと書かれているのを見ると、私たちは暗然たる気持ちにならざるを得ない。先に引用する機会のあった豚に真珠のくだりと、「わたしが暗闇であなた方に話すことを、明るみで言いなさい。また耳元でささやかれたことを、屋根の上から宣べ伝えなさい」(「マタイによる福音書」, X, 27.)との言葉の上での矛盾が最も先鋭的な形式で現れているのが、もとより啓蒙的な性質を持つ辞書であるとも言えるであろう。エゾテリスムのレキシコグラフィーは稿を改めて論じてみたい問題ではあるが、さはあれさしあたり今触れた矛盾の解消のための手がかりを挙げてこの注を結びたいと思う。「事を隠すのは神の誉れ。事を極めるのは王たちの誉れ。」(「箴言」, XXV, 2.)ところで、アデプトたちの集いである薔薇十字の最高指導者を正に号してインペラートル、すなわち王と言うのである。

<sup>21</sup> René Guénon, *Les Principes du calcul infinitésimal*, Gallimard, 1946, p. 123.

の収集に留まり全体へと達することはできない。その無力と好対照をなすのが総合である。「分析とは言ってみれば総合のための準備、総合へと導くものであって、それに終始するつもりでないにもせよ、常にまず分析から始めなければならないという説が一般に行われているが、その実、分析から出発したのでは総合へと真に到達することなど断じてできはしない。この語の本義にあって、およそ総合はいわば直接的なもの、いかなる分析によっても導かれず、まるで分析から独立したものなのである<sup>22</sup>。」我々として部分的な要素を積み上げながら分析が到達できないでいる全体に、総合は直接に、媒介なしに到達する。より正確に言えば、全体の直観的知識から出発して、部分を全体の中にしかるべき位置付けていくのが総合なのである。

当然、大方の念頭には次のような反論が去来しないではないだろう。なるほど、分析は全体に到達できないかもしれない、つまり全体の部分のことごとくを網羅するには至らないかもしれない。そのせいで、分析によって導き出される既知の部分の説明は、依然として未知なる部分に妥当するかもしれないが、妥当しないかもしれない仮説でしかあり得ない。にも関わらず、この仮説は既知の部分の全てに妥当しているのであり、その限りにおいて相対的にではあるが真であるとも言えるだろう。しかるに、総合による全体の直接的知識とは、理性によって誰もが辿って行くことができる推論を経ないものであるだけに、畢竟、主觀主義的独断主義的先入見であるに過ぎないのではないか。何という嗤うべき前近代的規範主義であろうか。

だが、論点先取 (*pétition de principe*) の批判をする前に思い出しておく必要があるのが、ゲノンにとって捉えようとする (*petere*) べきものは正しく原理 (*Principe*) であるということである。ここに言う総合は、エゾテリスマの伝統に、超人間的起源を持つが故に不謬不可謬の「智慧のエゾテリックな伝承」を起源 (*principle*) と持むのであるからには、オーソドクシーを、正統性

<sup>22</sup> Ibid. 見ての通り総合の分析に対する優越を認めているゲノンであるが、もちろん、その専門とする領域の内部における分析の有効性自体を否定しているわけではない。このことは、例えば、インドの分析的自然哲学と称することが出来るであろうヴァイシェーシカについての論説からも自明である (Id., *Introduction générale à l'étude des doctrines hindoues, op. cit.*, pp. 219-227)。何となれば、ヴァイシェーシカの分析もまた「ヴェーダの文章は〔最高神の〕知識に基づいている」(カナーダ編, チャンドラーナンダ註, 『ヴァイシェーシカ・スートラ』, 2009, 臨川書店, p. 162 (宮元啓一訳註)) ことを、つまりは超人間的起源を持っているが故に不可謬のヴェーダ聖典に由来する総合的知識を前提としたものであるからである。この総合的知識が分析的知識の有効性を担保しているのであり、「正しく知る手段が知識手段である、あるいは正しい知識が知識手段である」(同書, p. 243) 境地へと、手段と目的、分析と総合の識別の彼方への到達を可能にするのである。

と正当性を担保されているのでなければならない。這般の経緯を、ゲノンは同郷のオキュルティスト、ポール・ル・クールと自らとを対比しながら述べている。「私たちは彼を『探究者』（だからと言って彼の美点を毫も損ねるものではない）であると、時としていささか胡散臭い自分一個の見解に則って説を呈する人であると考えているのであるが、現に存続するいかなる伝統に連なるでもなく、直接的伝承によって受け継いだいかなる教えをとて持つでもないのであるから、それは彼の権利である。〔…〕しかるに私たちはイニシエーションの科学を事としているのであって、こなたかなたに相対するは、よしんば同じ主題を扱う場合にあっても、いかなる仕方であろうと軌を一にするべくもないような二つの視点なのである<sup>23</sup>。」

「探究者」、求める者ではないゲノンが行っているという「イニシエーションの科学」とは、現存する伝統に連なり、直接的伝承によって教えを授かった、いわば見出した者による、単なる個人の発明になる仮説をではなく、無謬でなければならない真理を呈する学知であり、その視点は伝統的かつ総合的なものである、ということになる。それはイニシエーションに基づく科学である。「この作者（ゲノン）は西洋語を用いる著者としてはごく希少な事例を呈している、と言うのは、この人の東洋思想についての知識は直接的であった、すなわち主として東洋人の師より授かったものであったのである。実に、東洋人からの師資相承にこそ、ルネ・ゲノン氏は、兼備するインドの諸教、イスラム教エゾテリスマ、道教の知識、サンスクリットとアラビア語の知識を負っているのだ<sup>24</sup>。」

<sup>23</sup> René Guénon, *Formes traditionnelles et cycles cosmiques*, Gallimard, 1970, pp. 40-41. 引用文にもあるように、公にされた作品を通じてゲノンの一人称は *nous* なのであるが、そこにも「一考に値するイニシエーション上の意味」（*Id., Comptes rendus, Editions Traditionnelles*, 1973, p. 119）があるという。もちろん、個人的なドクサではなく、自らが連なる法統のオーソドクシーの名において語っているという意味である。そして、このことは一人称 *je* が用いられている書簡の扱いを巡る議論とも関係してくるわけであるが、それはまた別の問題である。

<sup>24</sup> André Préau, « Connaissance orientale et recherche occidentale », *Jayakarnataka*, avril 1934, rapporté dans Paul Chacornac, *La Vie simple de René Guénon*, *op. cit.*, pp. 41-42. ハイデガーの翻訳者として知られるプレオーはゲノンの高弟の一人である。ところが、その死没直後、ゲノンを単なる伝統の代弁者としてではなく、キルケゴー尔の如き思想家として位置づけようという考え方から、「彼の作品の中には、既に公にされていなかったようなものは、あるいは知性でもって再構成できなかつたようなものは何もない」（*Id.*, « René Guénon : son temps et son œuvre », *France-Asie*, t. VIII, n° 80, janvier 1953, p. 1172）などと筆を滑らせてしまい、より純粹主義的なゲノニアンによって石もて追われる憂き目を見ることになった（Cfr. Marie-France James, *Esotérisme*,

だが、そればかりではない。イニシエーションに基づく科学は同時にイニシエーションについての科学、イニシエーションという形式を通じて授受される知識についての、要するにエゾテリスムの科学でもあるのである。「東洋のあれ西洋のあれ、およそイニシエーションを司る原理の一一致<sup>25</sup>」を、正しくイニシエーションを経て東洋人の師より授かった原理の知識に基づいて説くそれは、古今東西の伝統に関する総合的な科学でなければならない。

「かくしてゲノンの伝統主義は一般に伝統と解されているところのものとは類を異にする。二者は普遍的なものの特異的なものに対する、同一のもの、本質的なものの、いずれかの表現の偶有的な多様性に対するのと同じ関係にあるのである。ある伝統を——たとえ無上のものではあれ——それが持つ閉鎖的特異的なものの故ではなく、その内にあって、この名に値する他のあらゆる伝統にも程度に差はある完全な別の形式において存在している形而上学的内容へと立ち返らせるようなものの故に、引き立たせることこそが、ゲノンの目論見なのである。それは経験的ではなく“エゾテリックな”伝統主義である<sup>26</sup>。」

改めて話を戻すとして、それがイニシエーションに基づく科学であれ、イニシエーションを司る原理の科学であれ、いずれにしても俗人とは無縁の学知を伝えるのに、いったいどうしてゲノンは、選り抜かれた弟子への口授というピタゴラス以来の正しくエゾテリックな手法を取るのではなく、著作を公刊するというエグゾテリックな手段によったのであろうか。要するに、そもそもエゾテリスムにおける読書の意義とは何なのか。この問い合わせてゲノンは言う、「およそひとえに『書物による』知識は、単にその理論的段階において捉えられたものではあれ、イニシエーションの知識とは何らの共通するところとてない。[…]言葉の上で概念を記憶の中に積み重ねたところで、それは眞の知識の影をだにもたらしはしない。外的形式の下に包まれた『壺』の闡明にのみ意義があるのであり、この闡明は当の存在が自己の内に相応する可能性を保持していることを前提としているが、その所以はおよそ知識とは本質的には一体化だからである<sup>27</sup>。」理性の推論によってでは到達不可能

---

*occultisme, franc-maçonnerie et Christianisme aux XIXe et XXe siècles*, Editions Lanore, 2008, pp. 222-223)。ことほどさように、ゲノンの思想の妥当性の如何は、その起源の正統性と直結していると考えられていたのである。

<sup>25</sup> René Guénon, *La Grande triade*, Gallimard, 1957, pp. 12-13.

<sup>26</sup> Julius Evola, « Introduzione alla terza edizione (1972) », René Guénon, *La Crisi del mondo moderno*, Roma, Edizioni Mediterranee, 2015, p. 20.

<sup>27</sup> René Guénon, *Aperçu sur l'initiation*, Editions Traditionnelles, 1945, pp. 218-219。「言葉の上」の概念と「『壺』」の峻別は、「『文字』は人を殺し、『壺』は人を生かす」(「コ

な知るものと知られるものとの、認識主体とその客体とのこの一体化によって到達可能となる無謬の境地をこそ、エゾテリスムは目指しているのであった。書物を読む意味は、そこに記されている概念を記憶に蓄積していくことではなく、概念（文字）がその象徴であるところの《靈》へと到達することにこそある。しかし、当たり前のことではあるが、同じ本を読む人皆が一様に同じ結果に到達できるわけではない。象徴を現実化するためには、正しく天分が、理性のように人間的な手段によって練磨が可能なものではなく、超人間的な知性の行使の可能性を備えているのでなければならない。その意味において、ゲノンが読者として想定していたのは、作品中に文字によって象徴されている「“伝統の靈”自体との直接的接触のための素養がある者<sup>28</sup>」なのであった。

フルカネリの最有力の「容疑者」であり、若き日のゲノンとも親交があつたとされるピエール・デュジョルによるならば、鍊金術書は「誰もが知る言語で、しかしながら内に向かって書かれている<sup>29</sup>。」万人の知るところである言語によって書かれているという意味においてエグゾテリックである一方で、内に向かって、「当の存在が自己の内に相応する可能性」に訴え、それを現実化しようとする限りにおいてエゾテリックなのである。そもそもにしてからが、存在の内に象徴として先在するこの可能性の現実化こそが眞の鍊金術、眞の変成なのでなければならない。

エゾテリスト、ルネ・ゲノンは何のために本を書いたのか。エジプト人シャイフ、アブダル・ワーヒド・ヤヒア、「一者の僕」ヤヒアとしてその生涯を終えることになったゲノンは言う、「私たちは誰の、そして何の《僕》でもない、もしそれが真理でのなければ<sup>30</sup>。」したがって、世間一般の思想家が

---

リントの人々への第二の手紙」、III, 6.) を踏まえているのである。

<sup>28</sup> Julius Evola, « Introduzione alla terza edizione (1972) », René Guénon, *La Crisi del mondo moderno*, op. cit., p. 19. Cf.r トマス・ア・ケンピス, 『キリストにならひて』, 岩波書店, 1960, (大沢章・呉茂一訳). 「まことに彼らはことばを響かせることはできませんが、靈を与えることはできません。彼らは見事に話します、けれども、もしあなたが黙っておいで的话は、彼らは人の心に火を点じはできません。かれらは秘儀を持ち出します。だが封ぜられたことの意味を解明するのはあなたです。」

<sup>29</sup> *Les Nobles écrits de Pierre Dujols et de son frère Antoine Dujols de Valois*, Grenoble, Editions Le Mercure Dauphinois, 2007, p. 24.

<sup>30</sup> René Guénon, *Etudes sur la franc-maçonnerie et le compagnonnage*, t. 1, Editions Traditionnelles, 1964, p. 197. 見ての通り日本語としては通りの悪い順序で訳したのは、この一文がシャハーダのラー・イラーハ・イッララー、アッラーの他に神はなし、直訳すると「神はない、もしそれが神でなければ」を踏まえたものであろう

「自分個人の見解に則って」真理であると信じる「説を呈する」のとは事情が違ってくる。真理の僕である彼は、真理であることを知っている経義を、それが真理であることを知つていればこそ書くのである。では何故それが真理であると言い切れるのか。何となれば、「この人の東洋思想についての知識は直接的であった、すなわち主として東洋人の師より授かったものであつた」、そしてこの教統を遡って行けば、預言者へと行き着き、さらには超人間的な真理の源泉であるところの真理そのもの、神的原理へと至るからである。「誦め。そしてお前の主は最も気前よき御方であり、筆によって（書くことを）教え給うた御方であり、（つまり）人間に彼（人間）の知らなかつたことを教え給うた（御方である）<sup>31</sup>。」

---

ことを示したかったからである。と同時に、私は真理の僕であると言うゲノンの念頭には、「私は真理である」と称して処刑されたハッラージュのこともあったに違いない。

<sup>31</sup> クルアーン, XCVI, 3-5.